SSSB No. 24

種生物学会 ニュースレター

THE SOCIETY FOR THE STUDY OF SPECIES BIOLOGY NEWSLETTER June 2002

目次

ごあいさつ：シンポジウムを終えて ---- 1
第33回種生物学シンポジウム ---- 2
ポスター発表の記録
シンポジウム体験記
総会の報告
Plant Species Biology：英文誌編集状況 ---- 8
種生物学研究：和文誌編集委員会報告 ---- 8
書評：野生イネへの旅（森島 啓子 著） ---- 9
和文誌の今後（和文誌編集委員会の自己点検として） ---- 10
新入会員・会員異動 ---- 15
バックナンバーの販売 ---- 16
会費納入のお願い ---- 16

第33回種生物学シンポジウムを終えて

東京都立大学牧野標本館
若林三千男・菅原 敬

12月7日のプレシンポジウムおよびその後の2日間八王子大学セミナーハウスで開催された第33回種生物学シンポジウムも無事終了し、実行委員会一同ほっとしているところです。参加者数は170余名［内訳：学生62名、一般75名、講演者17名、都立大関係者（学生含む）18名］で、昨年より多く、盛会だったと思います。昨年以上に多くの方に出席していただいた背景には、ニュースレター以外にインターネットでの案内、情報提供が有効に機能したものと考えられます。ポスター発表も今年は17件、昨年の14件を上回り、森田会長の「出来るだけ多くの参加を呼びかけるように」というお達しをクリアーできたのではと思います。12月ということで、修論や卒業研究の学生たちにとって忙しい時期ですので、発表参加が少ないのではないかと心配しましたが、いろいろな大学の方に参加していただき内容的にもかなり幅の広い発表を見ることができたのではないかと思います。プレシンポも開始5時前には会場が満員となり大変盛況でした。夕食を挿んでの前半、後半のシンポでしたが、後半の部にはビール！ を飲みながらということになり、講演者にはちょっと失礼かなと懸念しましたが、講演者の堀田先生はむしろ喜んでおられたようですので、余計な心配だったかも知れません。

今年は昨年にひき続き都立大学が準備をお引き受けすることになった訳ですが、昨年は可知先生が中心になってやっていただいた関係で、今回は牧野標本館スタッフが中心になって準備を進めることになりました。「合宿型」大会運営や予算面のマニュアルがない状態で戸惑うことが多かったのですが、幸い、昨年の経緯を可知先生からお聞きしそれを参考に進めることができました。今後の大会運営のため、幹事会の方で「大会実行委員会は何をどこまでするか」というマニュアルを少し考えておかれた方がよいのではないかという印象をもちました。

今年は昨年と同じ会場でありながら、一人あたりの宿泊費が増加してしまいました。これは、前回使用できた宿泊棟が暖房設備の老朽化で使用できなかったことから別の宿泊棟へ変更せざるを得なかったためですが、これにより宿泊費が増額になり、一般一人あたりの参加費を1000円値上げせざるを得ませんでした。ご了承いただきたく存じます。

本シンポジウムは昔から若者を中心に自由奔放に議論することができる場でもありました。これに向けて本大会でも十分な飲み物を用意したつもりでおりますが、いかがだったでしょうか。来年の関西でのシンポジウムもまた盛会であることを祈っています。

第33回 種生物学シンポジウムの記録

開催期間：2001年12月7日～12月9日
会　　場：八王子大学セミナーハウス

● プレシンポ
「南西諸島の植物地理－分布と分化の過程」　堀田 満（西南日本植物情報研究所）

● シンポジウム1
「ブナの自然史」
オーガナイザー：戸丸信弘（名古屋大）、藤井紀行（東京都立大）

1) イントロダクション－ブナの種特性－　渡邊定元（立正大）
2) 化石と分子データからみたブナ属の起源と進化　百原 新（千葉大）、瀬戸口浩彰（京都大）
3) 花粉分析から見た最終氷期以降の植生変遷　米林 仲（立正大）
4) 分子系統地理学的解析によるブナ属の分布変遷過程　戸丸信弘（名古屋大）、藤井紀行（東京都立大）
5) ブナの形態形質の地理変異とこれが群集構造に与える影響　日浦 勉（北海道大）
6) 日本海側と太平洋側ブナの生態生理学的形質の相違　小池孝良（北海道大）、船田良（北海道大）、丸山 温（森林総合研究所）
7) 植物社会学から見た日本のブナ林　西本 孝（岡山自然保護センター）
8) 日本海型・太平洋型ブナ林の更新動態の相違とその要因　島野光司（電力中央研究所）

● シンポジウム2
「植物の生活史－フィールド研究の現状と今後の展開」
オーガナイザー：堀 良通（茨城大）、大原 雅（北海道大）

1) 植物の保全生物学における生活史研究の役割-個体群統計遺伝学的解析とその評価-　河野昭一（京都大・名誉教授）
2) 植物の生活史と推移行列モデル　高田壮則（北海道東海大）
3) 樹木個体群の更新維持機構に迫る-トチノキとサワグルミの個体群統計学　金子有子（滋賀県琵琶湖研究所）
4) コウヤボウキ連植物の林床環境への適応　河原崎里子（茨城大）
5) *Hibiscus moscheutos* の生活史－種子の運命－　工藤 洋（東京都立大）
6) アメリカブナの生活史過程と個体群統計遺伝学的解析　北村系子（森林総合研究所）
7) 林床植物個体群の存続を脅かす要因とその評価-オオバナエンレイソウの生活史と保全-　富松 裕（北海道大）
8) イヌホタルイの水田への適応と生活史　伊藤一幸（農業環境技術研究所）

● ポスターセッション

P-1. 熱帯樹木の生活史調査　　八田洋章（筑波実験植物園）・Izu Andry（ボゴール植物園）

P-2. テッポウユリとタカサゴユリにおける実生1年目の成長の地理的変異、および地方集団間の交雑親和性
比良松道一・吉村きよみ・大久保敬（九州大・農）・黄光亮・黄志偉（台湾嘉義大）

P-3. 小笠原の固有種オオハマギキョウの個体群動態：年変動を考慮した推移行列モデルによる解析
勝川俊雄（東大・海洋研）・可知直毅（都立大・理・植物生態）

P-4. マイクロサテライトマーカーを用いたオニグルミ自然個体群の花粉流動解析
木村恵・陶山佳久・清和研二（東北大・院・農）・Keith Woeste（USDA Forest Service）

P-5. ミズナラ堅果に含まれる総フェノール量と縮合タンニン量の部位による違いについて
和田直也（富山大・理・生物）・鎌田直人（金沢大・理・自然科学）

P-6. ギンリョウソウの物質分配様式　　山口力（富山大・理工・生物）・和田直也（富山大・理工・生物）

P-7. チガヤにおける競争種とストレス耐性種の確認－異なる土壌環境による栽培・競争実験－
水口亜樹（鹿児島連大・農）・土路生紘太郎・西脇亜也（宮崎大・農）

P-8. チガヤのストレス耐性種と競争種の日本列島における分布
西脇亜也（宮崎大・農）・水口亜樹（鹿児島連大・農）

P-9. 日本海型ブナ林低木種ヒメモチにおけるミトコンドリアDNAの地理的変異
平岡宏一・戸丸信弘（名古屋大・院・生命農）

P-10. トボシガラ（イネ科：ウシノケグサ亜科）の変異と環境適応能力
小林幹夫・大森寿枝（宇都宮大・農・森林）

P-11. 異なる標高と光環境下に生育する踏跡依存植物オオバコ（*Plantago asiatica* L.）における繁殖・貯蔵器官に対する物質分配パターンの相違－そして多年生草本における個体群構造の季節変化と年変化に関する一考察－
小林剛（北海道大・低温研）・岡本和泰・金沢裕子・堀良通（茨城大・理）

P-12. 日本列島広域分布植物の分子系統地理
大井哲雄・梶田忠・邑田仁（東京大・理・植物園）・若林三千男（都立大・理・牧野標本館）

P-13. 森林更新がもたらす林床環境の変化にたいする草本個体群の対応：LTREによる解析
小澤真弓・工藤洋・可知直毅（都立大・理・生物）

P-14. 富士山の異なる標高における雌雄異株多年草オンタデ（*Pleuropteropyrum weyrichii* var. *alpinum*）の性比の変異
古川武文・工藤洋・鈴木準一郎・可知直毅（都立大・理・生物）

P-15. 東アジアにおけるヒメゴウソの形態的、遺伝的分化
仙仁径・若林三千男（都立大・理・牧野標本館）・宮本太（東京農大・農）・鈴木武（兵庫県博）

P-16. 小笠原諸島父島におけるフトモモ属3群のニッチの違いは発芽～実生の定着率の違いで説明できるか？
藤田卓・工藤洋・加藤英寿・可知直毅・若林三千男（都立大・院・理）

P-17. 種子散布様式の違いが集団間の遺伝的分化に与える影響－フヨウ属モンテンボクとオオハマボウの場合－
高山浩司（都立大・院・牧野標本館）・大井哲雄（東大・院・理・植物園）・加藤英寿（都立大・院・牧野標本館）・工藤洋（都立大・理・生物）・若林三千男（都立大・院・牧野標本館）

シンポジウム体験記１

東京農工大学大学院連合農学研究科　岩渕祐子

今年も「再び八王子セミナーハウスでお会いしましょう」を合言葉に、2001年12月7～9日、第33回種生物学シンポジウムが開催されました。植生を扱う研究室に所属している私は、色々な分野で詳細なデータが蓄積されつつある「ブナ」の自然史、という魅力的なテーマに惹かれ、去年に引き続き参加しました。

８日に行われた「ブナの自然史」のシンポジウムでは、ブナ属化石に関する古生物・古生態学的データから、現生ブナの外部形態や生理生態的特徴、ブナ林の構造や更新動態、さらにはブナ集団の遺伝子から推定できる最終氷期以降の分布変遷過程まで、様々な分野からデータが提示され、ブナという種について過去から現在までの一貫した理解が可能となりつつあることがわかりました。

植生史にとても関心を持つ私は、今回のシンポジウムでの戸丸信弘さんと藤井紀行さんによる「分子系統地理学的解析によるブナ属の分布変遷過程」を興味深く拝聴し、同じブナという種にも様々な系統が存在することに驚くとともに、その系統が成立し得た歴史的背景を、古生態学的データからダイナミックに説明されたことに感激しました。最近の植生史の分野でも、埋没林など保存状態のよい化石が得られる場所では、化石から抽出したDNAの研究が進められており、遺伝子解析と植生史という異なる分野の協力によって、さらなる貴重な系統的・歴史的知見が得られるのではないかと思います。また、現生ブナの葉緑体DNA、ミトコンドリアDNAのハプロタイプの分布と、植物社会学的にみたブナ林群落の地理的分布域とに(偶然かもしれませんが)部分的な一致がみられました。ブナの系統と各ブナ林群落での種組成の違いが一致するという事実はとても興味深く、種だけでなく群落というマクロな視点から遺伝子をとらえることで、ブナ以外のブナ林構成種の分布変遷史を明らかにできる可能性を感じました。

卒論で花粉分析、修論で花粉形態、現在はコナラ果実の形態変異と、植生史を意識して外部形態に重きを置いた研究をやってきた私ですが、今回シンポジウムに参加して少しばかり考えさせられたことがあります。顕微鏡での花粉観察や、フィールド調査とノギスを用いたどんぐり計測をやってきた私のような学生は、遺伝子解析が植物研究のための華やかな手法であると思いがちです。しかし実際は、系統解析ができるという利点はありますが、遺伝子解析は、遺伝的に変異しにくい部位を抽出して比較するという、形態学的研究の一つであると考えることができると思います。従って、例えばある種の分布変遷を調べるには、1遺伝子形態の結果に満足することなく、外部形態など他の事実も合わせて考察することが重要であり、今回のシンポジウムのように様々な分野からのアプローチと総合的考察が不可欠です。

今年も種生物学シンポジウムは、勉強会を思わせるアットホームな雰囲気の中で会が進められました。このことは、初めて参加する研究者の方、学生などにとても親しみやすいとともに、他分野の研究者と一つのテーマについて議論できる非常に貴重な場でもあります。この形態がこれからも変わらずにいてほしいと思います。また、今回は「ブナ」及び「ブナ属」がシンポジウムのテーマとなりましたが、ブナ属を含むブナ科は、世界に広く分布する、森林の優占種となる重要な分類群です。今後、他のブナ科の遺伝子解析が進むことを期待しています。

シンポジウム体験記2

広島大学大学院国際協力研究科博士課程　亀山慶晃

実験や調査、データ解析に追われていると、ゆっくりと自分の研究を見直したり、今後の展開を考える時間が持てず、目の前の仕事をこなすのに一生懸命になってしまいます。私にとって、年に数回参加する学会は自分の研究に対するアドバイスをもらったり、新しい知識を得たりすると同時に、日頃の研究（現実？）から少し離れ、将来の研究に対する夢や構想を膨らませるいい機会になっています。特に種生物学シンポジウムは、同じような興味を持つ少数の研究者が深夜までお酒を飲みながら語り合うという、私のような学生にとってはまたと無い議論の機会を与えてくれます。

今回の種生物学シンポジウムでは、植物の生活史研究と遺伝マーカーの応用について考え続けていました。植物の生活史研究、特に個体群統計学的なアプローチでは、様々な生育段階における個体数の変動を記録し、そのような変動をもたらす原因を明らかにすることが目的になります。2日目のシンポジウムと複数のポスター発表からも分かるとおり、長期間にわたるフィールドデータを推移行列を用いて解析することによって、これらの目的の多くは達成できるようです。もちろん、植物の生活史は多種多様ですので、どのような生き方をしているのか分かっていない種は無数に存在します。個々の寿命が長い樹木集団や、絶滅の危機に瀕している植物、種名すら定まっていない分類群では、個体群統計学的なデータを取ること自体が難しく、今後の大きな課題と言えるでしょう。

一方、遺伝子の解析技術が急速に進歩したことによって、遺伝マーカーを用いて生態学的な現象を理解しようとする、いわゆる分子生態学的研究も増加しています。私自身もマイクロサテライト遺伝マーカーを使ってホンシャクナゲの研究をしてきました。超多型のマイクロサテライト遺伝マーカーを用いれば、個体レベルでの遺伝子型や集団の対立遺伝子頻度が詳細に明らかになり、親子分析や父性分析をおこなうことで、種子や花粉の散布パターンも解明できます。生活史特性の違いによって遺伝子流動の量やパターンがどのように変化するのか、その結果どのような遺伝的構造が形成されるのかといった研究は今後ますます盛んになっていくでしょう。

野外データに基づく植物の生活史研究と、遺伝マーカーを用いた分子生態学的な研究はいずれも重要な分野であり、それらを結びつけようとする流れはごく自然なことと言えます。今回のシンポジウムでも、各生育段階における個体数の変化と遺伝子レベルでの質的な変化とを総合的に解析する必要があるということは、複数の方が指摘されました。しかし、実際にどのような研究をおこなっていくのかについては、更に議論が必要だと感じました。例えば、個体数を遺伝子型や遺伝子頻度に置き換え、推移行列のようなモデルを用いて遺伝子レベルでの時間的変化やそれをもたらしている要因を明らかにすることも一つの方向かもしれません。遺伝マーカーを用いれば、近交弱勢のような自然選択に直接関与している現象まで考慮に入れ、個体群（遺伝子）の動態モデルを作ることもできるでしょう。また、中立な遺伝マーカーではなく、適応形質に直接関係する遺伝子を調べることができれば、植物の生活史研究と遺伝子解析、個体群統計学的研究が一つのものになるかもしれません。

遺伝子レベルで植物の生き様を解明しようという動きは今後ますます進むはずです。しかし、多くの方が指摘されたように、まず自然をしっかりと観察することが生活史研究の基本であり、楽しみであると思います。今回の種生物学シンポジウムでは、解析方法や実験手法に関する新知見はもちろん、いろいろな植物があるものだということに素直な感動を覚えることができました。

種生物学会2001年度総会資料

■ 報告事項

1. 庶務報告

(1)PSB関連事項
・誤植の発生に関わる編集業務の改善をBlackwell社へ申し入れ
・On Line Journalの開始（9月から）
・学術定期刊行物助成（100万円）の申請
(2)ニュースレター22号(7月)と23号(10月)を発行
・第三種郵便への登録申請
(3)学会のホームページを開設
http://sssb.ac.affrc.go.jp/
(4)植物分類学関連学会連絡会
・合同名簿の作成に参加
(5)その他

2. PSB編集委員会の報告

3. 和文誌編集委員会の報告

■ 審議事項

1. 学会運営方針
(1)PSBの国際誌としての発展を目指すとともに、学会員のための雑誌として充実させる。
・Blackwell社との契約更新（3年間）を2002年度に行う。Blackwell側の編集業務の改善を要求する。
・ISI Web-Scienceへの2002年度登録をめざす。
・学会員の投稿をうながす。
(2)和文誌の単行本による発行を継続し、定期的出版をめざす。
(3)種生物学ニュースレターの定期的発行(4月/9月)、ホームページの活用等により、会員間の交流を活発にする。
(4)シンポジウムの開催時期を基本的に12月上旬とし、次の2回は西日本で開催する。シンポのテーマに学会員の声が反映されるよう努める（ホームページの活用など）。
(5)片岡賞を再開する。
(6)2002年度からの会費値上げを執行し、同時に財政の健全化、安定化に努める。
・会費納入率の向上、滞納の一掃に努める
・学生会員の初年度会費の特別割り引きを廃止する
・出版費の抑制
・科研費補助金の獲得をめざす
(7)他学会との連携に努め、自然史関係への研究費の増額を図る。
・「日本分類学会連合（仮称）」への参加
・IAPT国際シンポジウム2004の共催

2. 会計報告及び2002年度予算案

(1)2001年度決算

2001年度会計報告（2001年1月1日から2001年11月20日分）は、2001年12月8日の総会において適性と認められた。しかし、会計年度は1月1日から12月31日であるが、本年度のシンポジウムが12月となったため会計監査を終え総会に計ることができなかった。そこで、2002年3月14日に会計監査を経た結果を報告する。

繰越金を含めた収入は、9,636,444円で、支出は6,606,958円，次年度繰越金3,029,466円の見かけ上の黒字である。PSB VOl.16(2001)の支払い約485万円と和文誌の支払い約70万円の支払が行なわれているはずなので赤字である。PSBにかんしては2001年の出版が完結しておらず請求が来ていない。また、和文誌は編集の遅れから出版できていないことによる。本来ならばこれらの費用の合計約550万円以上の黒字でなければならない。

主収入の会費収入は予算額では5,755,000円で、今年度は4,969,218円納入され、前年度の納入額3,403,000円の納入額に比べると、会員の方々からはたいへんご協力をいただいた。また、2001年当初には、長期会費未納者が41名約120万円の未納金があったが、年度末までに40万円を回収し、長期会費未納者は29名約80万円に縮小している。また、予算にある片岡基金の取崩し2,600,000円分は、今年度はとりくずさなかった。

これは、PSB VOl.16(2001)の支払請求と和文誌が発行されなかったために必要がなかったためである。さらに、Royaltyと超過ページ代の収入が予算より50万円ほど増収入となり、苦しい財政をわずかながら助けてくれた。

支出は各項目にわたり切り詰めた。しかし、年2回（2月と12月）のシンポジウムの開催により準備金が当初の予算学の二倍となり、また植物連合合同名簿の予定外の出費があった。

以上の結果、2002年3月14日にうけた会計監査において運営は適切であると認められた。

(2)2002年度予算

収入と支出の部は、ともに前年度の実績に従い例年通りの算出方法でおこなった。

収入の部で前年と異なる点は、今年度から片岡基金の取崩しとその利息分は本来の目的にそった運営にまわし、一般会計に組み込まないこととした。

支出の部においては、PSBの出版費の請求時期と和文誌出版が大幅にに遅れる見込みなので、今年度の予算からはずし次年度にまわした。今年度の特別なものは、長年京都大学理学部に収蔵されていたPSBと種生物学研究のバックナンバー約180箱のダンボール箱を京都から大阪に移送し、大阪学院大学と河野昭一氏の倉庫に移動さす移送費を計上した。その他の項目については予想される各項目の変動状況を考慮しつつ前年度の実績に従った。

種生物学会2001年度会計監査報告(2001年1月1日－2001年12月31日)

収入の部 項目	2001年 収入	2001年 予算	2000年 収入
会費	4,969,218	5,755,000	3,403,000
(01年分)一般		2,620,000	
(01年分)学生		140,000	
(滞納分)一般		2,658,000	
(滞納分)学生		337,000	
購読料	133,551	200,000	188,707
バックナンバー	12,310	50,000	0
預金利子	961	800	721
学術協会著作権	34,564	60,000	58,613
Royalty	154,029	67,000	0
片岡基金利息分繰入	1,279,556	1,111,556	0
片岡基金取崩繰入	0	2,600,000	0
超過ページ代	430,000		304,800
小計	7,014,189	9,844,856	3,955,841
前年度繰越金	2,622,255	2,622,255	4,752,452
合計	9,636,444	12,467,111	8,708,293

支出の部 項目	2001年 支出	2001年 予算	2000年 支出
印刷費	58,012	65,000	66,360
Newsletter (22,23)	58,012		
出版委託費	5,533,575	11,084,500	5,388,000
2000年(PSB 15)出版	4,839,000	4,834,500	
2001年(PSB 16)出版	0[1]	4,850,000	
1999年和文誌出版費	694,575	500,000	
1999年和文誌出版費追加	0[1]	200,000	
2000,2001年和文誌出版費	0[1]	700,000	
発送費	185,068	380,000	40,410
Newsletter郵送費	83,335	80,000	
1999年和文誌郵送費	101,733	150,000	
2000, 2001年和文誌郵送費	0	150,000	
事務費	304,234	382,610	182,216
和文誌編集、発送	0	25,000	
英文誌編集	208,461	257,610	
その他	95,773	100,000	
英文誌編集補助	217,000	384,000	0
シンポジウム補助金	200,000	100,000	100,000
自然史学会連合分担金	0[1]	20,000	40,000
会計監査交通費	800	2,880	2,880
その他(選挙関連)	6,745		266,172
植物連合名簿代	101,524		
小計	6,606,958	12,418,990	6,086,038
次年度繰越金	3,029,486	48,121	2,622,255
合計	9,636,444	12,467,111	8,708,293

[1] 出版されず
[2] 次年度まわし

一般会員:	410名 (+9名)
学生会員:	70名 (+16名)
海外会員:	33名
国内機関購読:	17名 (+1件)
計	530名

種生物学会2002年度予算(2002年1月1日-2002年12月31日)

収入の部 項目	2002年 予算	2001年 収入
会費	5,205,000	4,969,218
(02年分)一般	4,680,000	
(02年分)学生	360,000	
海外一般	165,000	
購読料	200,000	133,551
バックナンバー	160,000	12,310
預金利子	900	961
学術協会著作権	0	34,564
Royalty	75,000	154,029
超過ページ代	400,000	430,000
片岡基金利息分繰入	0	1,279,556
片岡基金取崩繰入	0	0
小計	6,040,900	7,014,189
前年度繰越金	3,029,486	2,622,255
合計	9,070,386	9,636,444

支出の部 項目	2002年 予算	2001年 支出
印刷費	60,000	58,012
Newsletter (24,25)	60,000	58,012[1]
出版委託費	5,068,550	5,533,575
2001年(PSB 16)出版	4,568,550	4,839,000[2]
2002年(PSB 17)出版	0	0
00-01年和文誌出版費	500,000	694,575[3]
2002年和文誌出版費	0	0
発送費	195,000	185,068
Newsletter郵送費	45,000	83,335[1]
00-01年和文誌郵送費	150,000	101,733[3]
事務費	400,000	304,234
和文誌編集、発送	50,000	0
英文誌編集	250,000	208,461
その他	100,000	95,773
英文誌編集補助	250,000	217,000
シンポジウム補助金	100,000	200,000[4]
自然史学会連合分担金	20,000	0
会計監査交通費	3,000	800
その他(選挙関連)	0	6,745
植物連合名簿代	0	101,524
バックナンバーの移送費	100,000	0
小計	6,196,550	6,606,958
次年度繰越金	2,873,836	3,029,486
合計	9,070,386	9,636,444

[1] Newsletter (22,23)
[2] 2001年(PSB 16)出版
[3] 森の分子生態学(種生物学研究23号)
[4] 32回(2月)と33回(12月)のシンポジウム分

PLANT SPECIES BIOLOGY

英文誌編集状況

原 登志彦

現在、Plant Species Biologyの第16巻3号の印刷に向け最終段階に入っておりますので、近日中に会員の皆様のお手元に届く予定です。同時に第17巻1号の原稿の入稿を行っています。Plant Species BiologyがBlackwell Scientific Publishers (Sydney, Australia)により刊行されるようになって3年経ちますが、その間、重大な誤植や著者の校正が最終的な印刷に反映されていなかったなど多くの問題が生じ、会員の皆様方には多大なご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫び申し上げます。これらの問題に対して、森田竜義会長と私の連名で、編集業務の改善をBlackwell社に申し入れました。それに対し、社長のMark Robertson氏よりお詫びと編集業務改善に対する丁寧なご返事をいただきました。また、私が副社長のShirley Greenさんおよび東京支社の田中久仁美さんと直接お会いして編集業務改善に関する話し合いを持ち、先日(12月7日、八王子)の英文誌編集委員会でもその点に関して議論を行いました。Plant Species Biology編集部とBlackwell編集部との連絡をより緊密にして編集部での校正作業を現在よりももう一段階増やすこと、著者に送る校正原稿にはBlackwell編集部がどのように英語を直したかなど校正履歴がわかるようにするなど、今後重大な誤植が生じないように最善の努力を行いたいと思います。

第16巻は河野昭一前編集委員長と新編集部の引継ぎをかねた共同編集体制でしたが、2001年の第17巻からは、新編集部ですべてを行うことになります。それに伴い、投稿規定の若干の変更を行いたいと思います。これまでは、論文原稿のコピー3部を投稿していただいていましたが、今回からは4部送っていただくことになります。図表については原図1部とそのコピー3部で結構です。これは、投稿されてきた論文の専門分野によりAssociate Editorである大原雅さん、工藤岳さんのうちの一人が(場合によっては私が)責任編集を担当しレフェリー2名の審査結果をもとに判断を下し、それにもとづきEditor-in-Chiefの私が最終決定を行うという編集体制をとるようにしたためです。またこれまでは、9ページ以上のregular articleにページチャージを設けていたのを11ページ以上に改めます。

また現在、Mike HutchingsさんとWilliam Grantさんから推薦書をいただき、Blackwell社のほうからISI Science Citation Index Journal Citation Reportへの登録を申請しています。来年の早い段階でその登録が受理されると思われますので、Plant Species Biologyもいよいよその国際的な認知度が高まるものと期待されます。今後、会員の皆様からのより多くの投稿を期待いたしたいと思います。

種生物学研究

和文誌編集委員会報告

川窪 伸光

和文誌編集委員会では、「花生態学の最前線(2000年発行・種生物学研究22号)」、「森の分子生態学(2001・23号)」に引き続き、現在、新たに3冊の単行本の編集を進めています。「保全と復元の生物学(種生物学研究24・25号)」は、九州大学の矢原徹一さんの責任編集により、本年、夏には発刊予定ですし、「植物生理生態学・光と水と植物のかたち(仮題)(種生物学研究26号)」も、東京都立大学の可知直毅さんの責任編集で、本年度中のできるだけ早い時期に出版される予定です。

また、昨年末に八王子セミナーハウスで開催された種生物学会シンポの2日目の内容を、「植物の生活史(仮題)(種生物学研究27号)」として発刊すべく、シンポのオーガナイザーでもある茨城大学の堀良通さんと北海道大学の大原雅さんの責任編集で作業がスタートしました。順次、上記の単行本がみなさんのお手元に届いてい行く予定です。

さて、暗中模索で進めてきた和文誌の単行本化で、やっと、年に1冊づつの発刊は維持できるめどがたってきました。しかしながら、当初、予定していたシンポ後1年以内の単行本発刊が実現できず、1冊の単行本の編集に1年半~2年を費やし、シンポ開催からほぼ2年遅れで発刊されている現状です。この問題については、学会員のみなさまに、ご迷惑とご心配をおかけしていることを、和文誌編集委員長および編集委員会は十分に認識し反省すると同時に、単行本の内容充実と定期刊行性との両立の難しさを痛感しているしだいです。

前回の総会では、今後の「1年1冊の発行配本」と「発行年にすべての在籍学会員へ配本」を承認していただき、事実上、現在の編集過程と約2年遅れの発行状態を追認していただく形になりました。今後は、12月に開催されるシンポの翌年中に編集の全体をほぼ固め、その次の年の早い時期に発刊していく方針です。いままでに培ってきた単行本編集経験をいかし、今後も、内容豊かで定期発行される単行本をお届けしていくつもりですので、みなさまのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

書評

森島啓子　著：野生イネへの旅（裳華房ポピュラー・サイエンス）

三浦励一（京都大学農学研究科耕地生態科学講座）

イネの祖先は当然のことながら野生植物である。それはどんな場所にどのようにして生きているのだろうか？　近縁種にはどのようなものがあるのだろうか？　また，栽培イネになる過程ではどのような進化が必要だったのだろうか？　本書は熱帯各地に野生イネの生育地を訪ねた調査の記録であり，またイネ属をつてとした植物学・進化学へのいざないの書である。

著者の森島啓子（もりしま・ひろこ）氏は国立遺伝学研究所に長く在籍された野生イネ研究のリーダーである。本書中では「どちらかというと，私は研究室での実験結果やコンピューターが計算する数字に一喜一憂するタイプの研究者だ」とのべられ，それは形態進化の研究に多変量解析をいち早く取り入れたことなどからも想像しうるのだが，やがて研究材料が「どんな生き方をしているかを知る必要にせまられて」，アジア・アフリカ・南米と，熱帯各地―しかも，多くは炎天下の湿地―を訪ね歩くことになる。

内容をざっとたどってみよう。

はじめに栽培種・野生種を含む世界のイネ属10数種のプロフィールが紹介され，著者にとってのイネ研究ことはじめが描かれている。1960年頃のことと思われるが，最新の数量分類学的手法を使ってみたくて，データを持ってソーカル博士のもとへ留学した，というあたりがすごい。次の章では，イネの直接の祖先である *Oryza rufipogon* が野生植物としてみせる生活史戦略とその変異が，わかりやすく解説される。

本書の中心をなすのは3章から5章で，それぞれアジア，アフリカ，南アメリカという異なる大陸に野生イネを訪ねた調査ノートである。著者の視線は生活や風景や現地の人々にも注がれ，楽しい読み物となっている。フィールドでの研究作法にも注目したい。

水位の季節変動の大きい場所に生えることがイネ属のひとつの特徴らしいが，この小さな種群が世界各地で見せる多様な適応の姿には感心させられる。あるものは一年生となり，種子で乾期を越す。あるものは地下茎で乾期を過ごし，水位上昇につれて茎をどんどんのばす。また別の多年生種は水位が高まると茎が切れて，水面に浮いて分散する。種子をとっても，乾いた土の中で眠り水が来ると発芽するもの，逆に水底で眠り干上がると発芽するものとさまざまである。湿地といっても大陸が異なれば環境的に大きく異なるらしく，それが近縁種間の個性をつくりだしているのがおもしろい。

旅のあとは，野生イネから栽培イネへの進化がどのように起こったかという古くからの問題にもどる。栽培穀類の主要な特徴は，農業を始めた人類が意識的に選びとったのではなく，収穫と播種のくり返しを通して無意識に―自然選択として―選ばれたのだと考えられているが，野生イネの実験集団をつくって実際にこれを確かめた結果は非常に興味深い。

最後に遺伝資源の保護という現代的課題がとりあげられる。視点は現地集団をとりまく状況に回帰し，野生のイネたちが消えてゆくのをなんとかしたいという著者の気持ちが伝わってくる。

フィールドと実験室を行き来しながら著者は，遺伝学・生態学・農学と，研究分野も自在に横断する。にもかかわらず，それらをつらぬく固い背骨のようなものがあって，強い印象を与える。単なるイネへのこだわりを否定する一方，遺伝学的知見の蓄積を利点として意識し，また「歴史としての進化研究は敬遠し，進化のしくみの研究にこだわった」という一貫したスタンスをのべる。何にこだわり，何にこだわらなかったか。参考にしたい。

個人的には，アフリカの章にのっている1枚の美しい写真が目の奥に焼きついてはなれない。アフリカイネの祖先である野生種 *O. barthii* の群落の中に立った女性が，籠をふりまわして穀粒を集めているところである。はるか農業以前の人とイネの関わりを想像させる姿である。

付記：本書は一般読者向けの体裁をとっているため，文献リストがついていない。研究事例について詳しく知りたい方は，次の総説を参照していただきたい。

1) Morishima et al. (1992) Evolutionary studies in cultivated rice and its wild relatives. Oxford Surveys in Evolutionary Biology Vol.8:135-184.
2) 森島 (1999) イネの進化研究を考える. 育種学研究 1: 233-241.
3) Morishima (2001) Evolution and domestication of rice. In "Rice Genetics IV. (ed. by Khush G.S. et al.)". IRRI & Science Publishers, 63-77.

和文誌の今後（和文誌編集委員会の自己点検として）種生物学会会長、ならびに幹事会への報告

和文誌編集委員長　川窪伸光

今年の5月1日、森田竜義学会会長より、現在の和文誌単行本出版の現状について改善提案があった。和文誌編集委員長である私としても、現在の和文誌編集は点検の時期に来ていると考えていたので、この会長提案を、和文誌編集員間のメールによる会議において議論し検討した。

種生物学会の和文誌「種生物学研究」は2000年から単行本として出版してきた。しかし、単行本化実施が承認されてから4年が経過し、現行の編集過程にはさまざまな問題点が浮上してきている。そこで、試行錯誤してきた和文誌編集の現状を紹介しつつ、和文誌の今後について和文誌編集委員会で議論した結果を報告する（なお、付録として文末に、和文誌編集委員の意見メールも掲載する)。和文誌編集委員会の、この議論内容を幹事会で議論していただき、今後の和文誌編集方針を定めていきたい。

●1．キッカケとなった森田会長からの提案

和文誌について相談いたします。和文誌の単行本化は、大きな意義があったと考えていますが、この時点で軌道修正が必要と感じています。

その理由は、

(1) 毎年1冊、定期的に刊行を維持してゆくことに困難が伴い、編集委員の負担が大きすぎること。

(2) 単行本として売れるということを条件に企画すると、テーマが限られ、早晩ネタ切れすると予想されること。

(3) シンポジウムのテーマが、単行本発行の目的により限定され、企画しにくくなっていること等です。

そこで私の提案なのですが、

(1) 今後の単行本化を一時休止する。計画されている5巻までは発行する。

(2) 種生物学研究は雑誌に戻して発行を継続し、主としてシンポジウムの内容を掲載する(アルバイトを雇いテープを起こしてもよい)。

(3) 必要に応じて随時、シンポの内容を単行本として発行する。

要するに、「すべてのシンポを単行本にするのはやめる」という提案です。いかがでしょうか

●2．単行本化の背景

1998年当時、「種生物学研究」という出版媒体が，シンポジウムの講演者の方々にとって、充実した原稿を寄せにくい媒体となってしまった(実際、シンポの講演原稿が、旧種生物学研究では、ほとんど集まらなかった)。その原因は、当時のシンポ講演者、特にDr取得前後の若手にとって、シンポジウムで講演した内容の総てを、「種生物学研究」に素直に活字化できなかった事情がある。これは、「種生物学研究」のような日本語雑誌での和文論文の業績評価が一般に著しく低い上に、プライオリティが心配で発表内容を詳細に書けなかったからである。したがって、「種生物学研究」が通常の学会雑誌的和文誌体裁をとっているかぎり、要旨的文章しか提出できなかった事情が，講演者（執筆者）にはあった。

そこで、読み手と書き手の双方にメリットのある印刷媒体とは何かを和文誌編集委員会で議論し、その結論としての一般書店の店頭にもならぶ単行本化を試みた。読み手には，かつての「種生物学研究」の魅力の復活を，そして書き手には「著書」と評価される業績の提供を目指した。この方針は、1998年2月（蔵王）での総会で承認された。

●3．単行本出版の現状

和文誌編集委員会は、1998年2月（蔵王）のシンポジウムの1日分「繁殖生物学の新しい潮流」の講演者を中心として執筆を依頼し，編集作業を開始した。その講演内容は2000年1月に「花生態学の最前線」として文一総合出版から刊行された。また、1998年12月（鹿児島）のシンポジウム「森林植物の繁殖構造と集団分化」の内容を充実させ、「森の分子生態学（責任編集：西脇・陶山)」が2001年2月に刊行された。既刊の「花生態学の最前線」「森の分子生態学」の2冊は、学会員をはじめとして、関係学会、種生物学関連分野の人々におおむね好評であった。特に「森の分子生物学」は出版後、2ヶ月で完売、重版した。既刊のこれら2冊は、学部教育、大学院初期教育において利用されている。

現在、1999年12月（神戸）のシンポジウム「生物種保全の評価基準を探る」、2001年2月（八王子）のシンポジウム「植物の多様なかたちと生理生態学」、2001年12月（八王子）のシンポジウム「植物の生活史」の内容を、単行本として出版できるように編集している。次期刊行予定は、1999年のシンポの内容に基づく「保全と復元の生物学（責任編集：矢原)」で、2002年秋には出版する見込み。

●4．単行本出版の試行錯誤

種生物学学会の単行本は、合宿方式シンポジウム、英文誌Plant Species Biologyとともに、いまや種生物学会の顔として、対外的に認知されるに至ったが、和文誌編集上に以下の問題点が浮上している。

(ア) 出版の遅延

和文誌は定期刊行物の「種生物学研究」の継続物として出版されたが、種生物学研究22号として刊行された

「花生態学の最前線」、23号に相当する「森の分子生態学」の両方は、約2年遅れで出版されており、1998年、1999年の2年間に出版の空白ができてしまった。

・現状の対策

2001年12月の和文誌編集委員会・幹事会・総会において、種生物学研究24・25号の合併号として「保全と復元の生物学」を2002年に刊行し、今後は、1年に1冊の割合で出版継続する案が承認された(シンポジウムから2年以内に刊行する編集過程)。したがって、植物の生理生態の単行本(種生物学研究26・27号の合併号)は2003年、植物の生活史の単行本(種生物学研究28号)は2004年に刊行する確認が行われた。

(イ) 編集作業の複雑化

単行本化は文一総合出版に協力を受けているものの、旧来の「種生物学研究」にくらべ、様々な点で編集作業は複雑化し、編集委員の作業負担が増加した。

・現状の対策

「森の分子生態学」からは、責任編集者制度を採用し、その責任編集者に多くの編集作業の中心を担っていただき、単行本には責任編集者を明記した。また、責任編集者の作業量の膨大さに鑑み、「保全と復元の生物学」からは、表紙と背に責任編集者名を記載する方針で、責任編集者に「仕事のしがい」の提供を試みる。

(ウ) 内容が単著者による単行本に比較して未熟である

単行本の内容は、種生物学会シンポジウムの講演に基づいているため、多くの執筆者によるオムニバス形式の内容になる。したがって、単行本全体の統一性においてやや難がある。また、執筆者によって異なる用語の統一は非常に難しい。

・現状の対策

責任編集者が執筆者各個人と連絡をとりながら、単行本全体の流れを調節し、かつ用語の統一を目指すと共に、読者の理解を促すような解説欄(もしくは章)を設けるようにしている。

(エ) 和文誌「種生物学研究」と名乗る矛盾

旧「種生物学研究」とは出版形式も内容も異なるのに、単行本を以前と同様に扱うには無理がある。定期購読をしている機関会員には混乱の迷惑をかけている。

・現在の対策

単行本のカラー表紙をはずした、本体の表紙と中表紙に「種生物学研究第・・号」と印刷するのみで、具体的な対策をしていない。

●5．和文誌編集委員会の問題意識ならびに会長提案への意見

・森田会長の提案に対し、以下の具体的意見が編集委員から提出された。

(ア) 森田会長が示した軌道修正の理由に対する意見

・軌道修正理由1：

毎年1冊、定期的に刊行を維持してゆくことに困難が伴い、編集委員の負担が大きすぎること。

編集員意見:現行の責任編集者制度と編集担当者の分担制の明確化で対応できる

編集員意見:編集委員長と責任編集者の負担度合いの再調整で対応できる

編集員意見：個々の編集担当者(和文誌編集委員)の負担を隔年かそれ以上にすることで対応できる

・軌道修正理由2：

単行本として売れるということを条件に(シンポジウムを)企画すると、テーマが限られ、早晩ネタ切れすると予想されること。

編集員意見：10年も経てば、新知見が山積みのはずであり、ネタ切れはしないのではないか

編集員意見：ネタ切れしない学会運営が必要

編集員意見：種生物学会の会員の活性をみると、1周り後は「第2弾」でも内容は充実できるのではないか

・軌道修正理由3：

シンポジウムのテーマが、単行本発行の目的により限定され、企画しにくくなっていること等です。

編集員意見:シンポ企画者がシンポ内容を単行本として刊行しようという意志を持ったとき、シンポ自体が充実するので、企画しにくいのではなく、企画に時間がかかるのではないか

編集員意見：若手には、単行本化があると、シンポ企画への意欲や、講演者になる魅力を感じるのではないか

(イ) 森田会長の提案に対する意見

・会長提案1：今後の単行本化を一時休止する。計画されている5巻までは発行する。

編集員意見：何らかの形で単行本出版は継続すべき。出版の意義は大きいと認識できる。

・会長提案2：種生物学研究は雑誌に戻して発行を継続し、主としてシンポジウムの内容を掲載する(アルバイトを雇いテープを起こしてもよい)。

編集員意見:学際的に眺めると、以前の「種生物学研究」スタイルには、今や魅力が乏しい。

編集員意見:WEB版の「種生物学研究」として、シンポの内容を定期的に掲載してはカラーページも掲載でき、講演要旨を整理して掲載できる。

・会長提案3：必要に応じて随時、シンポの内容を単行本として発行する。

編集員意見：出版に向くものだけに限定するのも一案。

編集員意見：シンポジウムの内容に限定しないで、学会員の企画提案など、柔軟に継続ことも考えられる。

・会長提案まとめ：すべてのシンポを単行本にするのは

やめる

編集員意見：単行本出版は、何らかの形で維持するいまや学会の顔である。さまざまな点、例えば若手学会員、学会全体活性化などにおいて意義がある。

編集員意見:シンポにどのように関わるかさらに検討する必要がある。

●６．和文誌編集委員長による総括

「種生物学研究」としての年１回の定期刊行、シンポジウム企画と連動、オムニバス形式の限界、これら３点が「良い単行本」を作る上で問題視されている。

◎ 学会として単行本出版事業は継続すべきあるとの意見で和文誌編集委員会は一致した。

◎「種生物学研究」との関係

意見１：単行本と定期刊行和文雑誌「種生物学研究」を切り離すのが現実的

意見2:「種生物学研究」は廃刊、もしくはWEB版にする。

意見３：「種生物学研究・特別号」、もしくは学会不定期刊行物として単行本を発行する。

◎シンポジウムとの連携

現在結論をみていない。従来も、単行本化するシンポとしないシンポがあり、すべてのシンポを単行本化してきたわけではない。

意見１：シンポジウム企画充実にために（企画者・講演者の意欲のために）、連携は重要

意見２：シンポジウムとは独立し、出版に意義のあるものだけに限定

意見３：学会員の企画提案などを含め、柔軟に発行

◎単行本の定期刊行

意見１：学会員サービスのため、原則として１年に一冊は刊行するものの、定期制はうたわない。

意見２：現在の２年をかける編集過程では、今後数年は１年に１冊を刊行できる見通しがある。

意見３：現行の編集体制で継続し、様子をみる。

◎多様な執筆陣によるオムニバス形式の限界性

責任編集者に統一性を意識していただき、編集委員長・編集委員はそれをサポートする。

単一著者では、なかなか実現できない視野の広い問題追求がなされる単行本を目指す。

◎現在、３冊の単行本の編集が同時に進んでいる。和文誌編集員会として、次期シンポジウムからの具体的対応を早急に明確化する必要がある。和文誌編集委員会だけで結論を出すわけではないので、この報告をもとに幹事会で検討していただきたい。

----------------- 付録 -----------------

各和文誌編集委員の意見

●西脇亜也　氏

この問題は、1998年２月に開催された蔵王シンポの時の幹事会で議論された和文誌廃止論まで遡るようですね。私は、その時はシンポの現地ホストでしたのでその議論には参加していなかったのですが、総会で蔵王シンポの１つのテーマである花生態関連の発表内容を書籍にして出版する予定だと聞いてぶったまげたことを思い出します。

当然ながら、講演者には出版計画のことなどまったく伝えていませんから、講演者への依頼先としてはおっかなびっくりでした。もし、みんなが断ったらどうするんだろうまた、正直言って講演者達は書籍の執筆者としてふさわしいのだろうか、本を書くような時間があれば論文を書いた方が良い人たちではないかとハラハラしていたのですが、その２年後に本になったのはびっくりでした。

私の感想としては、このような形で本が出せたのは、運が良かったのと委員長を初めとする関係者の多大な努力があったからだと思います。

２冊目は、色んな意味で狙って企画したシンポと出版でしたし、私自身は良い本ができたと思っています。私は連絡役をさせていただいただけですが、優れた執筆者陣とプロ編集者にも恵まれ、非常に楽しく本づくりに参加させていただきました。おかげさまで大学１、２年生の教科書に使わせていただいています。難しいが勉強になると好評のようです。

ところが、思いだしてみると、この本の編集作業をしている間、私の頭の中では和文誌でもあると言う考えは、ほぼ消え失せていました。川窪委員長と矢原会長から、和文誌なので早く編集を進めるよう督促があってはじめて、大変さに気がついて困惑したのを憶えています。

さて、今後もこの出版事業を続けて行くべきかどうかですが、私は出版事業と和文誌とは切り離すべきではないかと思います。正直言って、２冊出版された本は、やはり市販の本であり、和文誌の機能を果たしていません。実質上、種生物学研究は休刊状態にあると言って良いと思います。

何人かから、本には学会への連絡先も書いていないと苦情を受けました。花生態本では表紙カバーをはずした表紙と、扉ページには種生物学研究第22号と書いてあるのですが、これは本当なら特別号として出すべきではないかと思います。

このシリーズの意義はあったと思いますが、そろそろ軌道修正すべきとの問題意識には私も賛成です。

さて、問題は、かってのような和文誌「種生物学研究」を再開すべきかどうかでしょうか。

書き手の存在に関する問題、書かれたものに対するニーズの問題は98年頃とあまり変わっていないと思います。しかし、会員への情報伝達とシンポジウムの記録として質疑応答までが印刷される意義は大きいと思いますので、現在のニュースが持つ機能を包含した会報としての「種生物学研究」にスケールアップすることでよろしいのではないでしょうか。でも、私の案は「種生物学研究」のWEB版だけを出版するというものです。特別号としての出版事業は継続した方が良いと思いますが、年一冊出版するとの枠は外した方が良いと思

います。

もし「種生物学研究」のWEB版が出されれば、それだけを読みたいと希望する人も多いと思います。何より会員外の人にもオープンですので学会の宣伝になると思います。経費の削減にもなりますし、カラーページも使えるメリットがあります。ここまでオープンにすれば、既発表になるかどうかとか、業績にもならず、引用もできない出版物を出版することはどうかなどと気にすることも少なくなるように思います。先取権などを気にされる人は書かなければ良いだけのことです。

以上です。

●工藤　洋　氏

種生物学会は植物のフィールドバイオロジーにおける新しい見通しを国内に対しても発信し続ける学会であるべきだと思います。そのための媒体としての和文誌（単行本）であってほしい。

発信したいことを本にして、しかも売れれば良いというのが私達のスタンスではないでしょうか。出版社から種生物学会の本は売れそうもないので手を引きたいといわれるのならわかるのですが、種生物学会がネタ切れ宣言をするのは早すぎると思います。この学会からはまだ発信できると思います。むしろ、会員が「発信するなら種生物学会を通して発信したい」と思うかどうかの問題ではないでしょうか。今の和文誌の問題は「学会」の魅力とか勢いとかに直結する問題ではないかと思います。

前の形の和文誌で発信したいと思わないのではないでしょうか。前の形での和文誌を復活させる案は、現実的な案ですが魅力があるように思えません。後戻りするならこの際和文誌をやめて、ニュースレターを拡充するという案に賛成です。

私は今しばらく単行本の発行を継続させることに賛成です。2年あるいは3年に一冊の割合になるにしても定期的に出すのが良いと思います。そのためにシンポと本の関係を自由にするとか、和文誌としての位置付けをはずすとか、責任編集者を予算的にも人的にもバックアップする体勢をつくるとかの工夫が必要だと思います。そういった点を幹事会で検討していただけるとありがたいです。

やめるもよし、続けるもよし、でも後戻りはしないほうがよいという意見です。

●陶山佳久　氏

まず、基本的にシンポ企画の単行本化はなんとしても維持していきたいと考えています。その意義についてはほとんどの方が認めているところであり、せっかく立ち上げたこの制度を諦めてしまうのはあまりにも惜しいという気持ちでいっぱいです。問題点については、

(1)　編集委員の負担

現在の責任編集者制度と編集担当者の分担制が機能していれば、編集委員の負担はそれほどでもないように感じています。つまり、すべての編集委員が毎年の単行本編集に関わっているわけではないですし、特に責任編集者を編集委員以外に依頼している場合には、その負担がかなり分散されているはずだからです（ただし編集委員長には常に負担がかかってしまうことになりますが・・・。この場合、責任編集者の負担度合いを重くしていけば、ある程度軽減できると思います）。ですから、刊行が毎年であっても、個々の編集委員（および責任編集者）の負担は隔年あるいはそれ以上というシステムであれば、その負担は大きな問題にはならないように考えます。

(2)　ネタ切れ

10冊目程度でネタ切れするようなら、一回りした後に「第2弾」でもいいのではないでしょうか。それほど沈滞した現状ではないような気がします。たとえば「森の分子生態学」の第二弾ならすぐにでも打てるように思います。また、例えば各編集委員の得意分野を次々企画していけば、結構ネタはつきないのではないかと考えるのは楽観的すぎるでしょうか

(3) シンポテーマが限定される

上記(2)で「ネタはつきない」と楽観的に書いてしまいましたが、確かに「売れる本を強く意識すると、現実的には「ネタ切れ」「企画しにくい」という不具合が発生すると思います。こういった現実と、編集委員長をはじめ、みなさんのこれまでの論調を意識して、苦肉の策の折衷案を考えると以下のようになります。

つまり、基本路線は毎年シンポジウム企画の単行本化を維持し、出版に向かない内容のシンポジウムが企画された年だけは例外的に休刊するというものです。（ちょっと弱気でしょうか）そういったシステムは和文誌として問題があるかもしれませんが、これまでのように「合併号」扱いで切り抜けられないでしょうか

工藤洋さんの言うように、僕も前の形の和文誌に戻る案には消極的です。逆に、継続的に単行本を刊行できる学会というのはとても魅力的です。何とかしてこのシステムを維持する方向で知恵を絞っていただければと考えています。

●工藤　岳　氏

単行本刊行についてですが，「年一回の定期刊行」ならびに「シンポジウムの内容に限定する」といった枠をはずして，柔軟に継続するのがいいと思います．すでに刊行された2巻の評判は学生にも良く，すでに種生物学会の目玉として定着した感があります．また，このようなテーマ別の特集を学会で随時刊行するということ自体，非常に啓蒙的教育的意義があること考えます．しかし，「単行本の刊行を視野に入れたシンポジウムの企画」や「年一回の刊行」という脅迫観念にとらわれた運営では，「良いもの」をつくるのは難しくなってくるのではないでしょうか単行本と切り離したシンポジウムの運営を行い，シンポの企画者側が単行本として刊行しようという意向があったときにのみ，単行本化を考えるのが良いのではないでしょうか．また，シンポ企画側以外でも，会員からこのような特集で作ってみないかとの提案があれば，編集委員会で検討できるシステムにすればより魅力的でタイムリーなものができるような気がします．ネタ切れについての心配はあまりないように思えます．同じ内容のテーマであっても，10年もたてば新たな知見が山積しているのが進化生物学の現状ではないでしょうか．つまり，単行本は，特別号として維持していくというのが僕の意見です．問題は，会計上のことでしょうか（刊行が不定期になるため）．以前の「種生物学研究」の再開は，あまり魅力的ではないように思えます．WEB版にするというのは良い考えかも知れません．

●三島美佐子　氏

私はあまり重い話題とは考えていません。この和文誌は、はじめからトライ＆エラーでやっていこうという新しい試みであったのですから、今回は有益な最初のシューティングであるととらえています。

まずは率直な意見です。

＜単行本はありつづけてほしい＞

理由1：種生物学会の最大の魅力は、シンポと現在の和文誌

(=単行本) です。若い人の多くはシンポ目当てに会場に足を運び、この和文誌につられて入会するのです。これは鹿児島のとき入会受付をした際の実感でした。
理由2：シンポをやる場所やお金を出してくれた上に本まで作らせてくれるなんて、ある意味おいしいシステムだと思うのです。いつか企画を・・・と思っている若手は必ずいます。
理由3：やはり勉強になります。

<シンポ報告を主たる和文誌はいらない>
理由1：旧和文誌を読んでいて、生発言に近い文章の読みにくさやわかりにくさを感じた記憶があります。テープおこしに基づく記述を「シンポの様子が伝わる」「臨場感あふれる」というようにポジティブにとらえた記述も旧和文誌の中にあったように思いますが、私は読んでいてそのように感じたことはほとんどなかったと記憶しています。(ただし質疑の記録のあることは有益だったと記憶しています。)
理由2：仮にテープおこしでない報告にしたとしても、もし自分が発表者だったら、単なるシンポ報告のために論文相当の原稿を書くのはむしろ負担に思います。

以上をふまえ、現状を変えるという前提の場合の私の現時点での意見は以下のとおりです。
・ ニュースレターと英文誌以外の定期刊行物をなくす。
・ シンポと連動した単行本を単発で（毎年かもしれないし、不定期かもしれない）発刊する。

●矢原徹一　氏

さて、4人の方の意見がみな、「単行本」存続賛成、昔の和文誌に戻る案に反対 or 消極的だったことを、心強く思っています。若手がネタ切れを心配し、後戻りを考えるようでは、その分野の発展はあり得ませんからね。新しい企画やアイデアを出して、前に進んでください。

「種生物学研究」(昔の和文誌) が発刊された当時は、野外で植物の変異や生態を調べたいと思っても、参考になるものが何にもない時代でした。その当時の、「種生物学研究」と、種生物学シンポジウム（当時は植物実験分類シンポジウムと言っていた）のインパクトは絶大でした。私はM1の12月に白浜のシンポに参加して衝撃を受け、その後しばらくは、自分のオリジナルな研究方向について思案に明け暮れました。ほぼ一年後に、白浜シンポの内容を収録した種生物学研究2号が出た時には、むさぼるように読みました。3号からは編集に参加し、以後10年間くらい、「種生物学研究」の編集・発行に相当のエネルギーをつぎこみました。そこで得た知識・経験は、とても役立っています。また、「種生物学研究」の編集・発行を通じて、日本における関連分野の研究の活性化に大きく貢献できたと思います。

しかし、今や、生態学会でも、分類学会でも、白浜のシンポよりもはるかに高い水準の研究発表を聞くことができます。関連図書もたくさん出ているし、情報はあふれています。その中で、インパクトのある出版物を出していくには、内容が「熱い」ものでなければならないと思います。一年に一冊が無理なら、2年かかっても3年かかっても、良いものを出しましょう。

オリジナルな業績をあげて、英語の論文を書くことはもちろん大事ですが、一国の科学は、それだけでは進歩しないと思います。国際的に注目されるだけの、研究者の層の厚さを育てる必要があります。中立説で有名な木村さんが、各地で理論集団遺伝学の体系的な講義をして、「伝道師」であることに時間を割かれたおかげで、日本の拠点大学に講座をもたなかった集団遺伝学は、わが国でもっとも国際的競争力のある分野になりました。日本の生態学において、巌佐さんが果たされている役割は、説明するまでもないでしょう。種生物学会も、研究者の層の厚さを育てることにこれまで相当貢献してきたと思います。これからのことは、みなさん次第です。

若手・中堅のみなさんの「熱い」活躍を期待しています。

●横山　潤　氏

私も和文誌を単行本化したことは、対外的にはとても成功していると思っています。少なくとも種生物学会の名を知らない学部学生や異分野の研究者が、当学会の出版物を手にする機会が増えたことは、非常に意義深いことだと思っています。時間をかけて編集しているだけあって（当然その分即時性が失われてしまっていることは問題であるにしても）、出版物の内容も充実しており、primer としてもある程度の advance reading にしても推薦できる書籍となっていると思います（実際に私も学生さんなどに推薦しております）。2年かければ定期的にこのような出版物が刊行できるようになったシステムを、捨ててしまうのはもったいないと思います。

編集体制の複雑化や委員への負担の問題は確かに未解決の部分が多いと思いますが、私のように遊んでいる委員もいますので、フル稼働すれば解決可能かもしれません。

ネタ切れに関しては、私は全く心配しておりません。陶山さんがおっしゃるとおり、10年すれば同じテーマで再度単行本が組めるほどの新しい知見が集積していると思いますし、統一したテーマが難しければ、何回かにいっぺんは、完全オムニバスでもいいと思います（一昨年の若手シンポの単行本かを望む声も、学生さんなどからはありました）。

定期刊行物としての「種生物学研究」との整合性は確かに面倒な問題かもしれませんが、定期刊行物としての「種生物学研究」の看板を下ろしてしまってもよいというのであれば、ある意味それだけのことなのかもしれません。

そんなわけで、私は個人的には以下の編集委員会報告で結構だと思います。とりまとめご苦労様です。どうぞよろしくお願いいたします。

取り急ぎまして用件のみで失礼いたします。

●会長より返信

和文誌編集委員の皆様

熱意ある議論、ありがとうございました。意見を寄せられたすべての方の意向が、単行本発行の継続にあることを確認しました。当面の困難に目を奪われ、編集委員の意欲に水を差すことになったとしたら、おわびしなければなりません。しかし、「良質の情報を学会から社会に向けて発信する」という単行本発行の意義が再確認でき、今回の問題提起もあながち無駄ではなかったと思います。

2月の総会で承認されたように、「単行本はシンポジウムの後、2年間かけて完成させ、年1回の定期的発行を維持する」ことを基本に、価値のある本を創り出す努力を今後も継続したいと思います。「種生物学研究」との関係については、改めて議論しましょう。

森田　竜義

新入会員
会員異動

[redacted]

バックナンバーの販売

1）Plant Species Biology はVol. 1-13の各号を2000円均一で販売いたします。なお、団体での購入は各号を3000円均一とします。

2）種生物学研究は1－21号を500円均一で販売いたします。全号バラで購入の場合は21冊で10000円に割り引きいたします。

さらに、種生物学研究は、製本した版も販売いたします。製本はI-V, VI-X, 11-21の3分冊（各々の厚さが3.5-5.0cm）が1セットで、図書館に収蔵されるハードカバーの金背文字入り糸綴じ永久保存版です。今回特別に大学図書館に納入する業者に無理を申し付けましたのでかなり安くなっております。各々の価格は、第1分冊4300円、第2分冊4300円、第3分冊6500円。1セットを購入されると15000円に割り引きいたします。なお、団体での購入は1セットを20000円といたします。

創刊号の残部が60冊程度しかありません。そのほかの号は残部が十分にあります。

これらの価格の他、送料は購入者負担といたします。また、各号の目次についてはホームページ http://sssb.ac.affrc.go.jpを御覧下さい。

バックナンバーの購入を希望の方は、下記にメールまたは書面にて必要事項を記入し、お申し込み下さい。

購入希望書の送り先：
〒564-8511　吹田市岸部南2丁目36番1号1
大阪学院大学内　種生物学会　林 一彦
e-mail: lilium@utc.osaka-gu.ac.jp
FAX:　06-6382-4363
TEL:　06-6381-8434

購入希望書：
A. 購入者氏名：
B. 送り先：
C. 購入雑誌名とセットかバラか。
D. 購入号数：
E. e-mail アドレス：
F. 電話番号：
G. Fax番号：

会費納入のお願い

種生物学会の年会費は、前納制になっています，2002年度の会費は一般会員12,000円，学生会員6,000円です。まだ御納入いただいていない方はお振り込みいただきますようお願い致します。

会費納入状況は，PSBやニューズレターなどの送付封筒の宛名ラベル右下に完納年度を数字で示してあります。

（例）「-02」とあれば，2002年度分まで完納です。

（例）「-01」とあれば，2001年度まで納入されていますので，2002年度分をお支払いください。

（例）「-00」とあれば，2000(10,000円)，2001(10,000円)，2002(12,000円)年の3年分(32,000円)をお支払いください。

ただし1999年度分までは年会費は8,000円です。よって「－９８」とある場合には，４０，０００円(8,000+10,000+10,000+120,000) をお願い致します。

このほかにプラス記号「+」と数字が組合わされている場合があり，これは表示されている完納年度に余剰があることを示してあります。

（例）「-01＋1万」とあれば，2001年度まで完納ですが，2002年度は1万円しか納入されていません。よって不足分の2000円をお支払いください。

会費納入状況をお確かめのうえ，下記の口座に不足金額を納入ください。

郵便振替番号：01030-3-21704
口座名義：種生物学会

※　今回表示されている納入状況は2002年4月末までの入金分です。入れ違いにお振込みいただいた場合には御容赦ください。

※　郵便振替時の受領証は正式な領収証として認められます。できるだけ領収書発行の別個依頼は御遠慮いただければ助かります。

※　発送作業の都合で完納されている方にも振込用紙が同封されています。2002年度会費の納入にお使いください。御不明な点などございましたら，お手数ですが会計幹事まで御連絡ください。

電子メール：lilium@utc.osaka-gu.ac.jp
ファックス：06-6382-5463
郵便：〒564-8511　吹田市岸部南2丁目36番1号1
大阪学院大学生物学研究室内　林 一彦

編集兼発行人　新潟市五十嵐二の町8050　新潟大学教育学部生物学教室　森田竜義
発行所　新潟市五十嵐二の町8050　新潟大学教育学部生物学教室　種生物学会